



留学経験者インタビュー

洪 淑貴先生（名古屋第一赤十字病院）

1. 留学先

テキサス州立大学医学部ガルベトン校整形外科学教室（アメリカ合衆国）

2. 期間

2年間

3. 卒後何年目・何歳で

卒後11年目 36歳で

4. 留学を目指したきっかけ

機能解剖学的な研究をしたかったため、fresh frozen cadaver での研究が可能なアメリカへの留学を希望しました。

5. 留学費用

当初は私費で留学しました。研究室で grant が取れ、私の業績も認められたので、最後の半年は給料を頂きました。

6. 留守中職場・家庭での準備

大学にて論文博士を取るための臨床研究に目処がつき、赴任前の時期を狙ったので、特に問題は生じませんでした。家庭に関しては、独身なので特に問題はありませんでした。

7. 留学先での経験

バイオメカの研究室に所属して、主に cadaver の解剖とバイオメカの実験をしていました。手外科教授の research fellow だったので、手外科のカンファレンスには参加し、時々外来や、手術見学もしました。学会は、アメリカ手外科学会の annual meeting および biomechanical engineering の地方会などに参加しました。

8. 留学先での苦労

9月に着任したのですが、アメリカ南部の土地柄が、皆のんびりしており、まずは生活の立ち上げをなさいと、研究開始まで時間がかかりました。11月になると感謝祭がありますが、テキサス人はこの頃から holiday 気分になり、クリスマスが過ぎ、正月が明けまで仕事ははかどらなないと、同じ研究室の日本人エンジニアのポストドクに聞き、毎日のように研究をすぐに開始したい旨アピールし続けました。具体的に何をすれば研究を開始出来るのか、聞いて回り、それを一つずつクリアしてなんとか pilot study を感謝祭前に開始することが出来ました。

9. 留学での新たな経験

実験では engineer とのコラボレーション、また、論文執筆は department editor とのコラボレーション。専門分野が異なる人たちが力を出し合って、チームで1つの仕事を成し遂げる、アメリカらしい合理的なシステムだと思いました。

また、fresh cadaver の解剖をたくさん出来たので、非常に勉強になりました。特に手内在筋の実験をしていたので、その解剖の勉強が出来ました。

10. 帰国後の職場復帰

『お礼奉公』ということで、医師数が少ない地域の公立病院へ赴任しました。専門分野の手外科だけをやるという環境ではなかったので、留学以前の大学在籍中を合わせて7年ぶりに大腿骨頸部・転子部骨折の手術を戸惑いながら執刀しました。

11. 留学のキャリアへの影響

cadaver を多数解剖したことで、局所解剖の理解が深まり、手術のスキルが上がったと考えます。また、留学中論文を4本書いたので、論文を書くスキルも上がったと思います。

12. 留学を考えている先生方へ

漠然と憧れていた留学をなんとか実現させようと決心したきっかけは、ある先輩医師の言葉でした。『医師免許を持っているおかげで、他国で生活するチャンスを得られるなら、それはチャレンジしない手はないでしょう』と。外国で生活するということは、異文化に触れ、見聞が広がるほかに、日本を外から眺める=客観視する、とても良い機会になります。また、研究以外では、留学先で旅行をすると、時差ボケ無しに観光も出来ます。ぜひ、機会があればチャレンジしてみてください。